「地域の足」を確保せよ VOL.1

特集 輪・和・話 知恵の 人の マチの

その1 ふれバの挑戦！

町民の生活を支える上で大切な「公共交通機関」。通勤、通学、通院、買い物など自家用車の利用が増大した今も、誰もが自由に往来し活動するためにはなくてはならないものです。歴史的にも鉄道や国道とバス路線が整備された地域から経済活動が活発化し都市の発展に結びついてきました。しかし現在、人口減少、少子高齢社会を迎え、公共交通の役割も変化しています。今回からシリーズで、公共交通を考える「ふれバの挑戦！」、さらに「JR 電化は何を変える！」を連載していきます。

1 地域の足となるか！正念場の本格運行開始

少し将来のことを考えて見ましょう！

現在は、マイカーで生活交通のほとんどを賄えている人も、いずれは車を運転できなくなる時を迎えるのでは？その時、買い物や通院はどうなるでしょうか？

高齢者や児童、マイカーを持たない、いわゆる「交通弱者」になったとき、都市や地方、年齢に関わらず自由に移動することが難しくなります。一昔前まであった地方の路線バスは、モータリゼーションのため利用者が激減し、併せて地方経済の疲弊などで地方交通の補助も先細り、今や地方の路線バスは風前の灯の状態です。そんな中で、今年、当別のふれバは補助金なしの本格運行に移行しました。

2 全国が注目するふれバ　システム

そもそもふれバ誕生のいきさつは、北海道医療大学や町内医療機関が患者の送迎用としていた送迎バス、スウェーデンヒルズ住民専用のバス、さらに町のスクールバス、福祉バスなど合計 23 台ものバスが町内を走りながら自由に乗車できない不便さがありました。これらのバスを統合し、人々が自由に乗れる路線バスを新設し、お互いの負担を減らそうという発想が発端でした。このことから「現行のサービスを落とさずにどう統合するか」が一番の課題となり、それには徹底した路線とダイヤの研究がなされました。5 年間の実証運行を経て、今年は 4 台のバスで 4 路線・7 系統・平日 80 便、土日 28 便の運行にたどり着きました。

フラットな床で乗降が楽、お年寄りに好評のポンチョ

昭和 40 年代の中央バスターミナル

町内のバス路線の最盛期は昭和 40 年代。現在の勤医協当別診療所（末広）の位置に当別バスターミナルを拠点として札幌市、江別市、石狩町（当時）、新篠津村など近郊へ 8 路線、100 便以上の路線があったが、平成 17 年には当江線、青山線の 2 路線、22 便まで落ち込んだ

金沢線、JR 当別駅前の朝の通学の様子

また、効率の良い運行を行うために、運転手には町内の再就職希望者を雇用し、社会参加を促しながら人件費を抑制、運行に必要な機材の調達から修理までを一貫して運行委託会社が行い、さらにその燃料は環境に優しく燃料費の低減も見込めるバイオディーゼル燃料を利用するなど、経費削減の工夫がされています。

◆バイオディーゼル燃料（BDF）とは

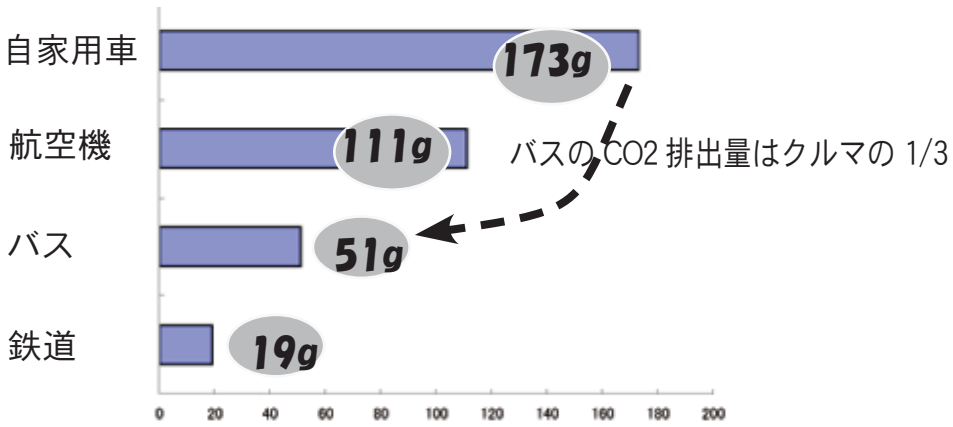
（左下）町民や食堂などの事業所から出る廃食用油は、軽油に代わってバスを動かす燃料「バイオディーゼル燃料」に精製される。年間３万４千㍑を回収し経費節減に寄与している。

（中央）給油は毎日お昼過ぎ、運転手自らレバーをひねる。このようにバスの運行を委託されている㈲下段モータースでは、燃料の調達、精製から車両の整備、バス停留所設備の製造など全てをこなし、コストダウンをはかっている。究極のエコへの取り組みと言えます。

（右下）バイオディーゼル燃料精製装置、１日で 200 ㍑の精製ができ、副産物として出来るグリセリンも洗剤として利用しています。

小学生対象に行われた環境教育学習でバイオディーゼル燃料を学ぶ

乗り物 Co2 排出量（1 人 1km を運んだとき）



資料：交通エコロジーモビリティ財団

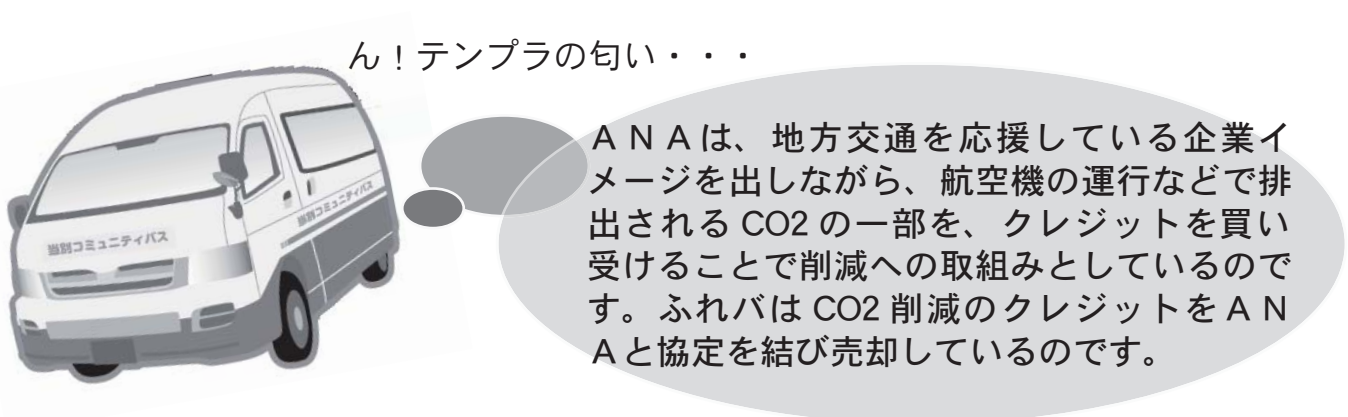
3 これからのキーワード「環境」を訴える

カーボンオフセット（二酸化炭素排出権）という言葉をご存知ですか。今、ガソリンや石炭など化石燃料を燃やすことで発生する二酸化炭素（CO2）の増加が地球温暖化の原因と考えられ、世界的に問題となっています。ふれバの燃料であるバイオディーゼル燃料は CO2 を出さないのでしょうか。

この燃料は油の原料となる植物（菜種、ひまわりなど）それ自体が光合成により大気中の CO2 を吸収していることから、それを燃料として燃焼させても、元来大気内に存在した以上の CO2 は発生させない（カーボンニュートラル）という考え方なのです。つまりバイオディーゼルの場合、吸収量＝排出量ということ。しかも捨てられる油の再利用品。これによれば、この燃料は太陽光や風力などと同じく、再生可能エネルギー。だから環境に優しいといわれます。町内の小学校ではふれバやバイオディーゼル燃料を通して、このような環境学習のほか、クルマ社会における運動不足と健康、クルマの取得・維持経費、事故などのリスクについて授業の中で学ぶ取組みをしてきました。

4 ふれバの車体にＡＮＡのマークどうして？？

※ふれバとＡＮＡの協定は平成 23 年 7 月末まで



なんたってふれあいバスだからね

定年退職後の平成 18 年からふれバの運転をしていますが、細心の注意で安全運行を心がけています。時々ですが「大変でしょ！どうもありがとう」と声をかけてもらうとやっぱり嬉しい。今年はお客さんへのサービス向上の為にと、会社で接遇講習がありました。自分でも少しは良くなったかな。最近、バスへの苦情が減ったと聞いてます。

難しいのは冬道の運転、道路も滑って時間通りにならないこともありますが、安全第一ですよ。お年寄りが乗ったときは着座するまでルームミラーで確認します。特に急発進、急ブレーキには注意を払います。バスに家庭用油をボトルで持ってきてくれる人もいます。この油を精製して 6km 位走れるんです。ありがたいですね。お互いの協力でふれバは走るんです。

ふれバ運転手の　渡部さん

5 定期券は応援券？

ふれバは１回１路線一律 200 円（小学生、障がい者と介護人は 100 円）。走行キロによる従量制によらないわかりやすい考え方です。ふれバでは普通の定期券ではなく、「地域の足」をみんなで支えあうという願いを込めて、応援券を販売。定期利用者には、全路線乗り放題としています。このほか、10 回分の料金でお得な 12 枚綴りの回数券、夏休み・冬休み限定の子ども定期券、一日乗車券など利用形態に合わせた購入が出来ます。

6 なぜバスに乗らない？　クルマがあるから！

これほど工夫のつまったふれバですが、全ての町民が利用しているわけではありません。昨年行われたアンケート結果からは、買い物の交通手段ではふれバはＪＲやタクシーをやや上回ったものの、クルマの利用の足元に及びません**（図２）。**〈通勤、通院も同様の傾向〉これは半数以上の方がクルマを所有しクルマ中心とした生活様式を確立していると考えられます**（図 1）**。

今後はクルマだけに頼らない、多様で自由な移動手段の確保が重要になります。環境問題、あるいはクルマにかかる経費や交通事故などのリスクを考えた時、公共交通の賢い利用は、もっと豊かな生活を送ることに繋がるのです。

図１　回答者の自動車所有状況

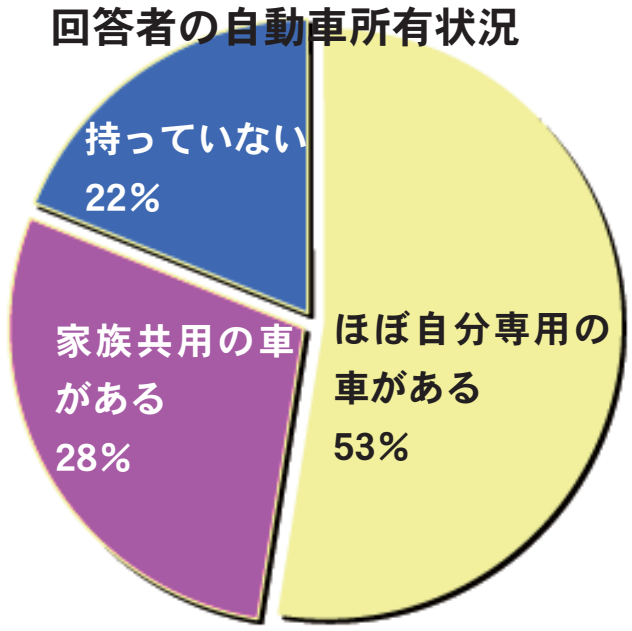
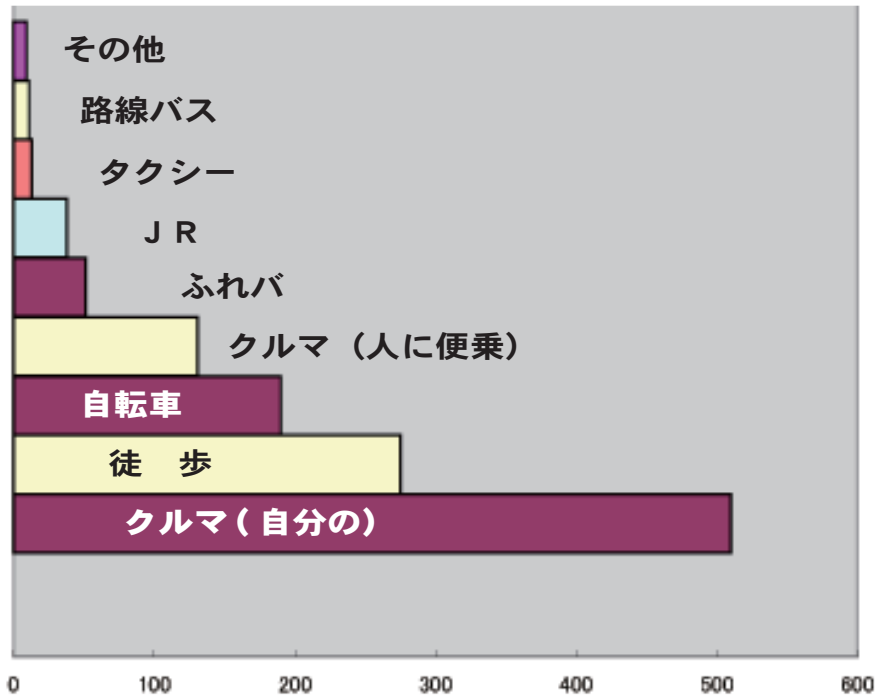


図２　買い物に行くときの交通手段は？



資料：当別町地域公共交通活性化協議会
「バスアンケート」平成 22 年度実施から

次号に続く‥‥

高齢社会に対応したまちづくりを意識したとき、地域の足を確保する、誰もが家に閉じこもらないで移動できる手段 - これが当別町がふれバに期待する答えです。

次回は、ふれバの運営面、路線についての課題、利用者の生の声をお知らせします。

JR とふれバは町内の公共交通のカギ

ふれバクイズ

問　題

ふれバの燃料は、家庭で使用済みの油を精製した□□□□□□□□燃料。環境に優しい再生可能エネルギーです。

□に入るカタカナ８字をお答え下さい。

プレゼント

正解者の中から抽選で 10 名の方に、当別町地域公共交通活性化協議会より、ふれバグッズのトートバックとバスペーパークラフトのセットを差し上げます。

応募方法

はがき、ファクス、Ｅメールで、①クイズの答え、②郵便番号、住所、氏名、年齢、③電話番号、④広報紙へのご意見を記入し情報課まで。１人１通。7 月 25 日（月）消印有効。発表は発送を持って代えさせていただきます。

企画部情報課広報広聴係　061-0292 白樺町 58-9
☎ 23-3069　FAX23-3206　Ｅメール：kouho@town.tobetsu.hokkaido.jp